

巻頭言

きたる二〇二〇年の創立百周年を迎えるにあたって、内外に「これまでの百年」とともに「これからの百年」ということがしきりに謳われている。

「これまで」なのか、「これから」なのか、二者択一ではなく、その双方に立脚して百周年を考えるのが望ましいことむろんだが、百年のうちの三十三年、ほぼ三分の一の春秋を本学で過ごしてきた我が身としては、筒井康隆の次のような言葉を支えにしたいと思っている。

伝統を知ることとはそこから抜け出して新たな可能性をさぐることができるという可能性をわれわれにあたえてくれるもの、だからこそ学ばなければならないものではないだろうか。新たなことに挑戦しようとしていてそれに行き詰まったとき、いやというほど知り尽している筈の伝統の中に新たな道が見つかったり、別の突破口を示唆されたりすることがあるからこそ、伝統とは「守らなければならないもの」なのではないだろうか。

『短篇小説講義』岩波新書、一九九〇・一六

つねに日本の現代文学の前衛として、小説の新局面を切り拓いてきた作家ならではの言葉だ。

これを服膺して、自分に何ができるのかを問えば、昨年六十周年を閲した「近代文庫」の価値を高からしめてゆく努力をするしかないように思う。いうまでもなく、これまでの私の研究が、近代文庫と『近代文学研究叢書』の恩恵をほかの誰よりも深く受けてきたからであり、ここへ足を運べば調査の大枠がととのえられ、論究の骨格や方向がおのずから定まってしまう、その「有難さ」を忘れないようにしたいと願っているからである。

もっとも近代文庫は、昔のままではなく、少しずつかたちを変えているので、最近は新聞の所蔵が充実し、「都新聞」「時事新報」「万朝報」等の復刻版が入って、国立国会図書館へマイクロフィルムを見に行かなくても済む場合が以前より増したのは慶ばしい。

従来は個人として近代文庫を活用し、論文を発表してきたが、現在は百周年へ向けて、近代文化研究所の所員と協同し、貴重資料を翻刻紹介する研究に着手しており、その成果はやがて本「学苑」に発表されるはずである。

さらに進んでは『近代文学研究叢書』全七十六巻別巻一、収録三百九十四名のデジタルデータ化もまた今後の重要な課題である。というのは、『叢書』の各巻刊行後に諸家から寄せられた手紙の中には、激励の言葉とともに、修正補足をすべき点も多く含まれており、長いあいだ、この貴重な指摘に応えるすべを持たずに来たためである。もし、これまでの「著作年表」「資料年表」の誤記誤植を改め、内容を補訂したうえで、収録の情報がデジタル化されたなら、人名・作品・事項の検索が容易になり、多様な情報が有機的につながった膨大な資料体が完成するにちがいない。

「これまで」の貴重な遺産を「これからの百年」に活かす大計として具体化できるよう、検討を重ねて行きたいと思う。（吉田昌志）